

形成外科

吉龍澄子

1999年7月に大阪医療センター皮膚科内に形成外科の常勤医1名が赴任してスタートし、2000年4月1日より診療科として形成外科を標榜しました。形成外科は現在常勤1名、レジデント1名の2人体制で診療を行っています。外来は外科外来の11、12診察室で火、金の午前に行っています。

当院は形成外科学会の教育関連施設に認定され、形成外科専門医取得のための卒後教育にも当たっています。

当科は、自科で行う診療および複数の科とのチーム医療における再建外科を2本の柱として行ってきました。院内での腫瘍外科手術の増加に伴い、チーム医療における再建外科としての比率がやや高くなっています。

形成外科としての診療では、主に顔面、頭頸部の皮膚悪性腫瘍、皮膚腫瘍、眼瞼形成術、ケロイド、瘢痕拘縮、顔面神経麻痺の形成手術を扱っています。

顔面の腫瘍の中でも特に眼瞼の腫瘍は、腫瘍の治療という点からだけでなく、眼瞼の機能、および整容的にも満足いく治療を行うのが重要と考えて治療方針を決め、術式も工夫を行っています。眼瞼癌について放射線科、眼科の協力のもとに、手術だけでなく照射療法なども選択枝に入れて、十分な説明の上患者様の希望も考慮して治療方針を決定しています。顔面の皮膚癌においてもoncologyだけでなく、整容面も重視して手術再建を行っています。

新たな試みとして顔面の皮膚癌について、四肢の腫瘍や乳癌でおこなわれているセンチネルリンパ節検査の導入を試み、その皮膚癌に適したリンパ節郭清を行う方針を採っています。

その他創傷外科医としては、治療困難な真性のケロイドに対して、切除後の放射線照射療法を含む治療に取り組んできました。症例に応じて、切除後放射線外照射あるいは組織内照射を行っています。ケロイドに対して組織内照射療法を施行しているのは本邦では当施設のみです。

もう1つの診療の柱として当科では、院内の外科系各科の癌の切除後の再建に取りくんできました。頭頸部再建、乳癌再建が主なものですが、その他四肢、体幹の再建も増加しています。頭頸部再建は形成外科開設以来180例を超え、大部分がマイクロサージェリーによる遊離皮弁による再建症例です。耳鼻咽喉科、口腔外科、形成外科、放射線科で頭頸部カンファレンスを行い、術前の症例を検討しています。外科、耳鼻科、口腔外科、形成外科、放射線科、脳外科などによるチーム医療体制が良好なため、現在まで再建皮弁の全例生着しており、安定した再建成績を維持できています。乳房再建は、主に広背筋皮弁、腹直筋皮弁、遊離穿通枝皮弁などの自家組織による再建を行ってきました。2007年より人工乳房による再建も開始し、患者様の再建の選択枝が増えました。ただし、人工乳房は保険診療が認められていないため、入院費、手術費を自費で負担していただいています。今後も悪性腫瘍、顔面の形成、再建外科、皮膚外科を中心に診療する方針です。

【2010年度研究発表業績】

B-3

吉龍澄子、森田耕輔、深井 恵：顔面皮膚癌の植皮術の工夫。第26回日本皮膚悪性腫瘍学会学術大会 2010年6月4日～5日（東京、新宿）

B-6

藤原貴史、深井 恵 : Medial sural artery perforator free flap による頭頸部再建の経験。第 96 回日本形成外科学会関西支部学術集会（大阪）2010 年 12 月 4 日（土）

B-8

吉龍澄子 : European Institute of Oncology(ヨーロッパ癌センター) in Milano に留学して。第 34 回大阪形成医会（大阪）2011 年 2 月 20 日（日）